

# 家族墓へのアプローチ

—北近畿後期弥生墳墓の場合—

肥後弘幸

## 1. はじめに

弥生時代の墳墓には、墳丘や一定の独立した平坦面および周溝などによる小区画の中に多数の埋葬施設をもつものが見られる。同一区画内の被葬者間には、生前何らかの有機的な関係があったことが容易に予想される。その集団構成は各地域・各時期の社会構造と密接に関わり合い様々な様相を示していると言えよう。かつて筆者は「丹後地域の弥生墓制」の中で、これらの墳墓を安易に「家族墓」という用語で整理したことがある。

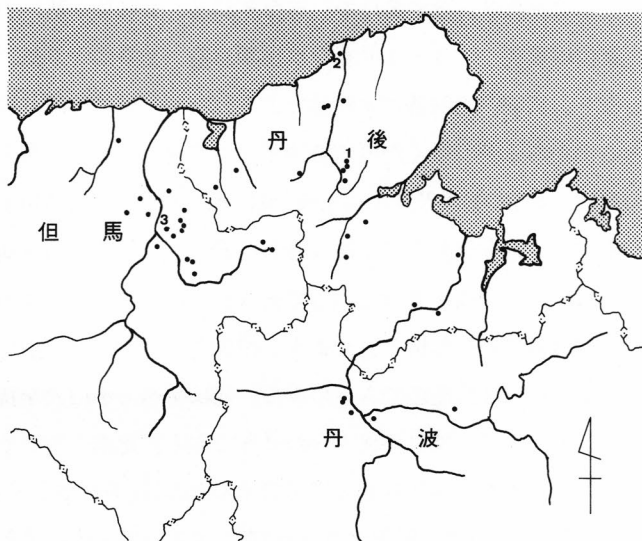
本稿では、北近畿地域の弥生時代後期の主要な三墳墓群を取り上げて墳墓に葬られた被葬者集団の構成を明らかにし、当該地域の社会構造解明の手掛かりを得ようとするものである。なお、墳墓の被葬者構成を明らかにする手法として、近年形質人類学の研究成果を用いることが盛んであるが、当該地域での弥生人骨の良好な出土例は皆無であり、もっぱら考古学的手法に基づきいくつかの仮定をもとに論考を進めていくことにする。

## 2. 構成要素の検討

対象とする墳墓群は、京都府中郡大宮町左坂墳墓群の一部、同竹野郡丹後町大山墳墓群及び兵庫県豊岡市上鉢山東山墳墓群である。<sup>(注1)</sup> 個別の検討を行う前に前提条件の整理を行う。

### (1) 地域・時期の設定

弥生時代後期(後期末を除く)の丹後・北丹波・但馬地域を対象とす



第1図 墓内破碎土器供献の分布と三墳墓群の位置  
(1/1,000,000)

1. 左坂墳墓群 2. 大山墳墓群 3. 東山墳墓群

る。以下の共通点がある。

**立地と形態** 墳墓は、丘陵上に営まれる台状墓である。墳墓の造営は、区画された一定の埋葬空間を連続的に確保することが主目的とされたため、必ずしも溝で区画された明瞭な墳丘をもつものではない。

**副葬品** 刀剣類及び鉄鏃(銅鏃を含める<sup>(注2)</sup>)の鉄製武器、やりがんな・刀子の鉄製工具類及びガラス製・碧玉製の玉類を副葬する。このような副葬指向は、この時期全国的に見て北部九州地域と並んで突出した傾向にある。なお、当該地域では、弥生時代前期～中期前半にかけての石鏃の副葬と中期の碧玉製管玉の副葬例が認められるが<sup>(注3)</sup>、後期の副葬指向は、新たに生じたものと考えられる。

**土器供献** 「墓壇内破碎土器供献」と呼ぶ特徴的な土器を用いた葬送儀礼が存在する(第1図)。「墓壇内破碎土器供献」とは、木棺内に遺体を安置し蓋をした後、破碎した土器を棺の周辺や蓋上に置く行為である。弥生時代後期初頭に丹後・北丹波・但馬を中心に急速に普及し、後期中葉以降変容し衰退していく。成立当初は、調理容器(甕・壺)と飲食容器(高杯・鉢等)を墓壇内破碎供献するが、後期中葉以降は、調理容器を墓壇内破碎土器供献し飲食容器(高杯・鉢・器台等)を墓壇上で破碎供献するようになる。

## (2) 埋葬施設の構造と被葬者

埋葬施設には、木棺墓、土壙墓、土器棺墓がある。三墳墓群の埋葬施設の構成は、

左坂墳墓群15～18号墓 木棺墓33基、土壙墓6基、計39基

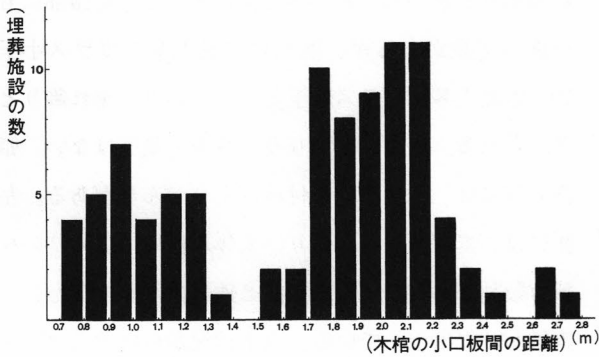
大山墳墓群3～8号墓ほか 木棺墓33基、土壙墓5基、土器棺墓9基、計47基

東山墳墓群1・3・4号墓 木棺墓38基、土壙墓か1基、不明1基、計40基

となり、126基中104基が木棺墓である。なお、棺材は残りの良いもので木質として確認できる例があるが、多くが木棺痕跡として確認したものである。棺内の被葬者数は、副葬品の配置・木棺の規模及び周辺地域で弥生時代の合葬人骨の出土例がないことから1名とする<sup>(注5)</sup>。

木棺は、扱う資料全てが組み合わせ式木棺である。当該地域では、弥生時代後期後半までの木棺は全て組み合わせ木棺であり、現状では後期末の峰山町金谷墳墓群が削り抜き式木棺の最初の採用例と言えよう<sup>(注6)</sup>。棺構造については、小口穴を持つ例(福永分類Ⅰ型)<sup>(注7)</sup>が東山墳墓群で2例確認できるのみで、他はすべて小口穴を持たない例(Ⅱ型)である。むしろ注目すべきは、棺材の組み合わせ方である。比率の差こそあるものの、各墳墓群とも両側板が小口板を挟み込みさらに突出するもの(以下H型とする)と側板も小口板も突出せず箱形になるもの(以下箱型とする)が存在する。婚入者を考える上で有効と考える。

木棺の大きさ(外法)を小口板間の距離で比較したのが第2図である。その分布の中心は1.7～2.2mである。棺材の厚さが確認できるもので5～15cmであることからその内法は



第2図 三墳墓群における木棺規模(小口間の距離)の分布

付表1 三墳墓群の木棺規模(小口間の距離)比較

	乳幼児 ~1.2m	小児・青年 1.2~1.7m	成人 1.7~2.8m	小計
左坂墳墓群	14	2	17	33
大山墳墓群	3	5	21	29
東山墳墓群	8	3	21	32
小計	25	10	59	94

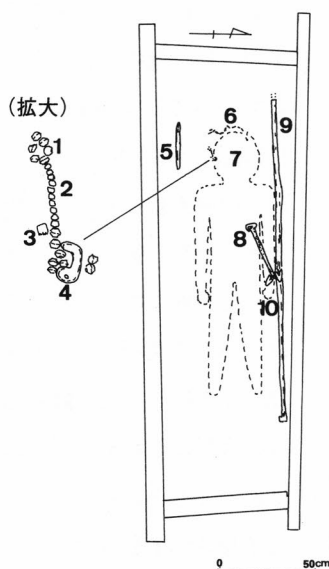
されよう。すなわち、木棺の小口間の距離はある程度被葬者の身長を反映していると考えられる。

一方、木棺墓以外の墓として土壙墓及び土器棺墓があるが、その規模・形態から土壙墓は乳幼児～小児棺、土器棺墓は乳幼児棺と推定される。土壙墓および土器棺墓の採用については墳墓群ごとに特徴があり興味深い。付表1は、各墳墓の木棺規模を乳幼児、小児～若年、成人にわけて比較したものである。土壙墓と土器棺墓を考慮するとその配分がほぼ等しくなり、三墳墓群の被葬者の年齢構成が似かよっていることがわかる。なお、原始社会における未成人での死亡率は50%を超えることを考えると未成人の被葬者が少ないのは、何らかの理由で墓に葬ることのできない未成人層があると考えざるを得ない。

### (3) 副葬品から見た被葬者

当該地域の弥生時代後期の墳墓の最大の特徴は、鉄製品と玉類の副葬指向である。三墳墓群の初期の例として、左坂17号墓第1主体及び東山3号墓第5主体などがあるが、ここでは副葬品の集中傾向が明瞭な左坂墳墓群とその南方500mに位置する大宮町三坂神社墳墓群を見てみることにする。三坂神社墳墓群は、左坂17号墓第1主体や東山3号墓第5主体の時期に巨大な墓壙と多くの副葬品をもつ3号墓第10主体を契機に造墓活動が始まる。三坂神社3号墓第10主体の副葬品の配置を見よう(第3図)。被葬者の顔から胸にかけては多量の朱がかけられており、朱の濃淡から被葬者の頭の位置が推定できる。額付近に

1.5~2.0mとなる。弥生時代後期には、膝の伸展化が完了していることを仮定すると、1.7m以上の木棺を15~20歳以上の成人棺とすることができる。なお、弥生時代北部九州・山口地方の成人推定身長は、およそ男性163cm・女性151cmであり、北近畿の弥生人の身長はこれを下回ることはあっても上回ることはない。一方、小さなピークが0.7~1.3mに認められるが、これは乳幼児での死亡率が高いことと対比



第3図 三坂神社3号墓第10主体  
棺内副葬品配置状況  
(注6一部改変)

- |             |          |
|-------------|----------|
| 1・3. 水晶玉    | 2. ガラス小玉 |
| 4. ガラス勾玉    | 5. やりがんな |
| 6. ガラス管玉    | 7. 朱     |
| 8. 素環頭鉄刀    |          |
| 9. 漆塗り杖状木製品 |          |
| 10. 鉄鏃2     |          |

は頭飾りと思われるガラス管玉が連なる。側頭部にも一連の玉類があるが、配列は水晶玉8+ガラス小玉10+水晶玉8+ガラス勾玉となっており、垂れ飾りと考えられる。一方、首飾り及び手玉・足玉はない。頭部右側には、木製の柄を付けたやりがんながある。左腰には、素環頭鉄刀があり、人体左側には漆塗りの杖状木製品がある。杖状木製品と鉄刀に重ねて柄付きの鉄鏃が2本出土している。出土状況から副葬品はいずれも棺内遺物と考えられる。鉄製大型武器を持つことから被葬者は男性であろう。同じく鉄製大型武器をもつ左坂1号墳下層墓第5・第9主体及び左坂26号墓第2主体の副葬品の組み合わせは鉄刀(鉄剣)<sup>(注10)</sup>+鉄鏃+鉄製工具等であり、玉類をもたない(第4図)。大山墳墓群では、鉄鏃・銅鏃との組み合わせは、3号墓第1主体(鉄鏃+ガラス管玉1)以外には、鉄製工具との組み合わせがあるのみで、玉類との組み合わせは例外的である。東山墳墓群では、玉類と鉄製品の組み合わせはない。

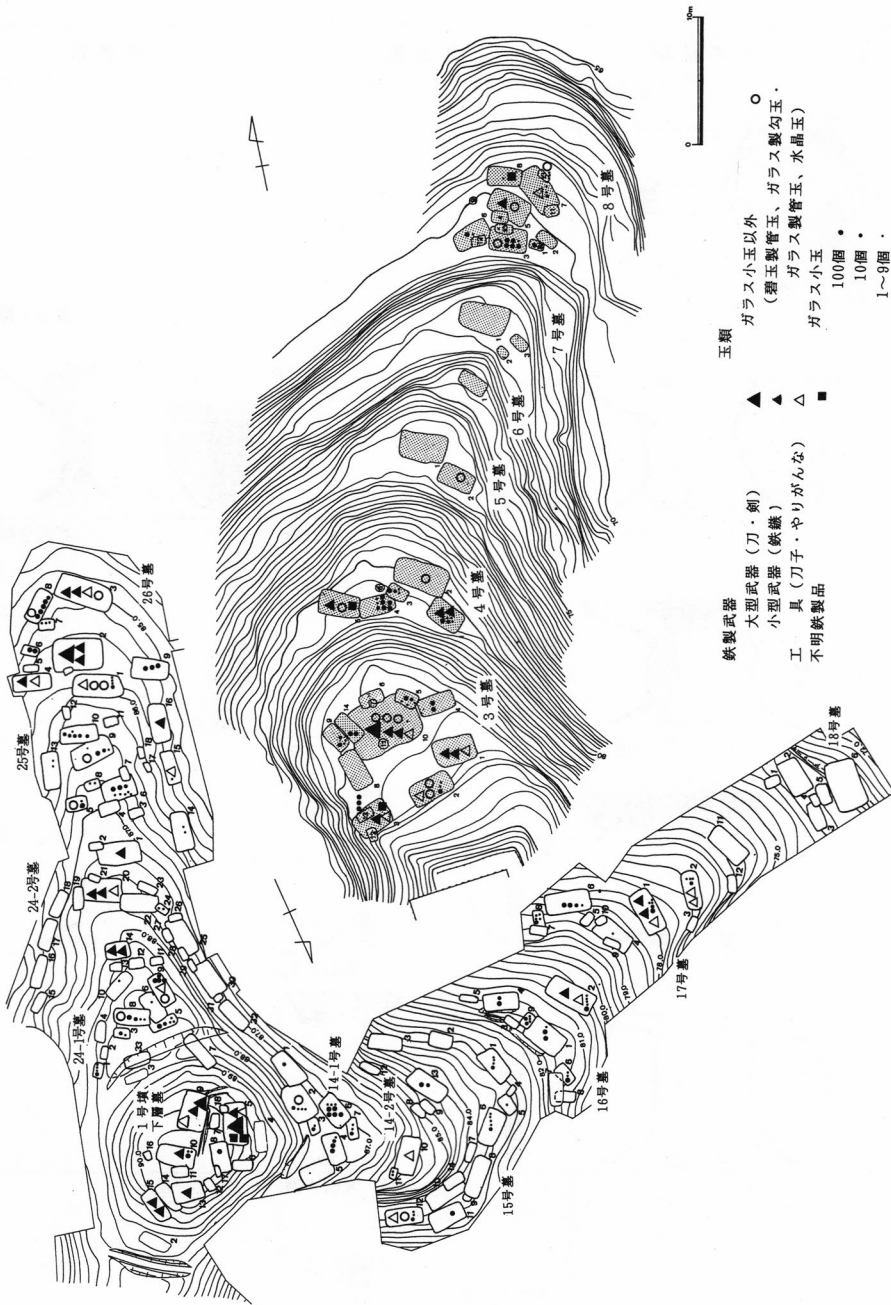
以上のことから、鉄製武器及び工具を持つ被葬者は男性、玉類のみを持つ被葬者は女性と考えられる。なお、未成人については、男女の検討を敢えてしないこととする。

#### (4) 時期の細分(第5図)

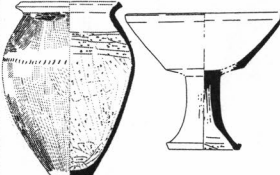
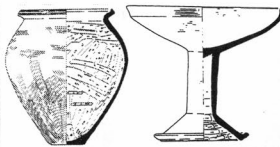
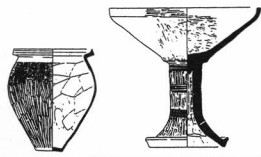
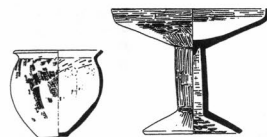

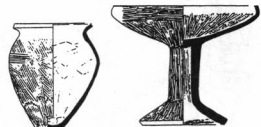
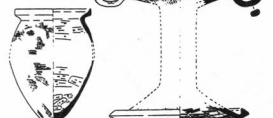
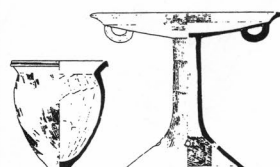
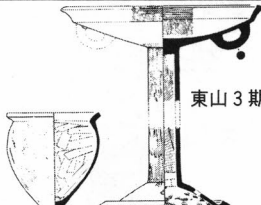
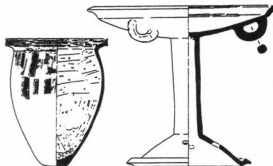
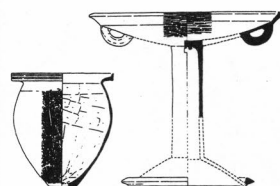
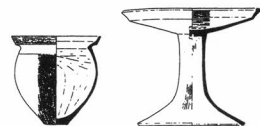
三墳墓群の土器群を比較すると、最も西に位置する東山墳墓群出土土器群に、中部瀬戸内地域の影響を強く受けた甕と台付き鉢が目立つ点を除くと、共通性の高い土器群として捉えられる。

北近畿地域の後期弥生土器編年については、石井氏及び谷本氏の成果があり、概ね後期を古段階、中段階、新段階および庄内併行期と考えられる終末期と4期編年が編まれている。<sup>(注11)</sup>一方、筆者は、丹後地域の新資料を用いて石井編年の修正と新段階の資料の2分を試みたことがある。今回は、<sup>(注12)</sup>一世代一型式をめざしさらに細分を試みたが、後期初頭の土器群を細分できたにすぎない。各墳墓の土器の編年と併行関係を第5図と付表2に示した。ここでは、仮に1~6期として、甕・高杯の変化を簡単に説明する。

1期 中期末から後期初頭。甕は中期的色彩が色濃い。後期高杯の祖型出現。



第4図 左坂墳墓群(丘陵部のみ・左)と三坂神社墳墓群(右)の副葬品の分布図(注10より転載)

	左坂墳墓群	大山墳墓群	東山墳墓群
中期末	1 左坂1期 		
	2 左坂2期 		東山1期 
後期初頭	3 左坂3期 	大山1期 	東山2期 
	4 左坂4期 	大山2期 	東山3期 
後期前葉	5 左坂5期 	大山3期 	
	6 後期後葉	大山4期 	

第5図 三墳墓群出土土器対照編年図

付表2 三墳墓群の埋葬施設の時期

	左坂墳墓群	大山墳墓群	東山墳墓群
後 期 初 頭	1 18号墓第2主体 18号墓第6主体 (左坂1期)		
	2 17号墓第1主体 17号墓第6主体 18号墓第1主体 18号墓第4主体 18号墓第5主体 (左坂2期)		3号墓第5主体 3号墓第7主体 3号墓第8主体 3号墓第9主体 3号墓第10主体 4号墓第1主体 4号墓第2主体 4号墓第18主体 (東山1期)
	3 16号墓第1主体 16号墓第2主体 16号墓第4主体 16号墓第6主体 17号墓第5主体 17号墓第8主体 17号墓第11主体 (左坂3期)	3号墓第1主体 5号墓第1主体 5号墓第2主体 周辺第8主体 周辺第26主体 (大山1期)	1号墓第2主体 1号墓第5主体 1号墓第11主体 3号墓第1主体 3号墓第3主体 3号墓第4主体 3号墓第6主体 4号墓第3主体 4号墓第4主体 4号墓第7主体 4号墓第9主体 4号墓第12主体 4号墓第13主体 4号墓第15主体 4号墓第15主体 4号墓第16主体 4号墓第17主体 (東山2期)
	4 15号墓第1主体 15号墓第6主体 16号墓第8主体 16号墓第9主体 17号墓第2主体 17号墓第4主体 (左坂4期)	周辺第1主体 周辺第5主体 周辺第6主体 周辺第7主体 周辺第9主体 周辺第11主体 周辺第27主体 (大山2期)	1号墓第4-2主体 1号墓第7主体 1号墓第8主体 3号墓第11主体 4号墓第10主体 4号墓第14主体 (東山3期)
	5 15号墓第3主体 15号墓第8主体 15号墓第10主体 15号墓第11主体 15号墓第12主体 15号墓第13主体 (左坂5期)	7号墓第1主体 8号墓第2主体 8号墓第2主体 周辺第3主体 周辺第12主体 周辺第13主体 周辺第14主体 周辺第15主体 周辺第18主体 周辺第28主体 土器棺1、土器棺2、土器棺5 土器棺9 (大山3期)	
	6 後 期 後 葉		周辺第16主体 周辺第17主体 周辺第22主体 周辺第25主体 土器棺3、土器棺4、土器棺6 土器棺7、土器棺8 (大山4期)

- 2期 後期初頭前半。後期甕出現。高杯杯部が浅くなる。脚内部ヘラケズリ。  
3期 後期初頭後半。中期甕消失。甕口縁に2～3条の擬凹線出現。高杯脚部内面ハケ。  
4期 後期前葉。2～3条の擬凹線甕盛行。中部瀬戸内の甕消失。後期高杯の成立。  
5期 後期中葉。甕の複合口縁化、擬凹線も多条化。  
6期 後期後葉。甕の複合口縁化が進み、口縁が外反化。5字状口縁の高杯出現。  
以下、本稿では各時期を概ね1～2世代の時間幅として扱う。

### 3. 各墳墓群の分析と復原

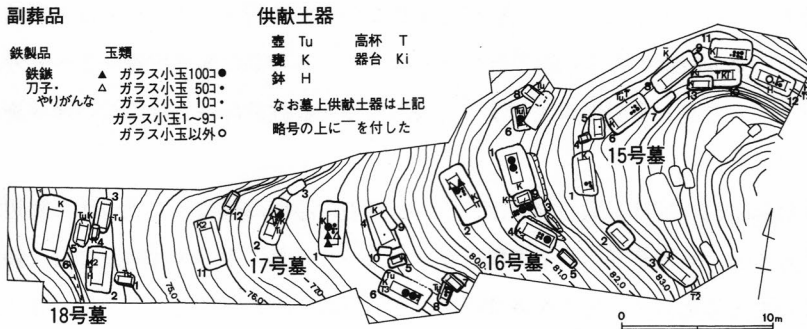
#### (1)大宮町左坂墳墓群(第6・7図)

左坂墳墓群は、京都府中郡大宮町字周枳小字左坂ほかに所在し、丹後半島中央部を貫流する竹野川中流域左岸の低丘陵上に立地する。丹後地域最大規模の左坂古墳群の南西部G支群の一角にあたる。弥生時代後期初頭から後葉にかけて、丘陵尾根線上の11基の台状墓を中心に総数136基の埋葬施設が営まれる。ここでは、京都府教育委員会が調査し報告書が刊行されている南尾根上の4基の台状墓を扱う。

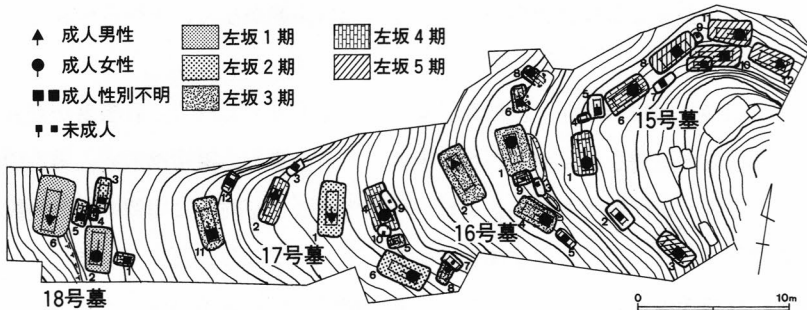
4基の台状墓は、南の尾根先端から18号墓→17号墓→16号墓→15号墓と計画的に造墓活動が行われている。墳墓群最大の墓壙と木棺をもつ18号墓第6主体が造墓契機と考えられ、三坂神社3号墓第10主体との対比から男性と考えられる。各台状墓の埋葬施設数は、6～12基で台状墓間の格差は認められない。鉄製品及び玉類の副葬は17号墓から開始される。17・16号墓では、鉄鏃をもつ男性が中心的位置を占め、18号墓も含め各墳墓の築造契機となったのが男性であることがわかる。中心的埋葬施設の造墓時期がスムーズに移行していることから同一系譜の家族が代々家長の死を契機に造墓活動を行ったと考えられる。埋葬施設の大半は木棺墓で、乳幼児を葬った5基の土壙墓があるが、土器棺墓はない。土器棺墓は、墳墓群全域でも丘陵稜線上には認められず、隣の三坂神社墳墓群(土器棺は3基あるが他は全て木棺墓)と好対象をなす。大半の木棺墓に墓壙内破碎土器供献が認められれば全ての木棺墓の時期がわかる上、その供献場所が玉類との関係から足元側に限定されていることがわかり、被葬者の頭位がわかる。

次に女性の出産年令を20歳、成人の死亡年令を40歳、夫婦は同一年令と仮定して被葬者集団の関係を考えてみる。核家族を想定すると第8図のようなひとつの親族関係を示すモデルを作ることが可能である。15号墓を除く3墳墓は、比較的夫婦の抽出が容易である。左坂墳墓群の被葬者群が、H型木棺を採用する家系とするならば、箱型木棺を採用する17号墓第1主体(男性)及び16号墓第1主体(女性)は、他集団からの婚入者と考えられ、双系的な社会構成と言える。中心的な夫婦以外にも成人被葬者がいるが、既婚者かどうかは不明





第6図 左坂墳墓群の副葬品と供献土器(1/500)

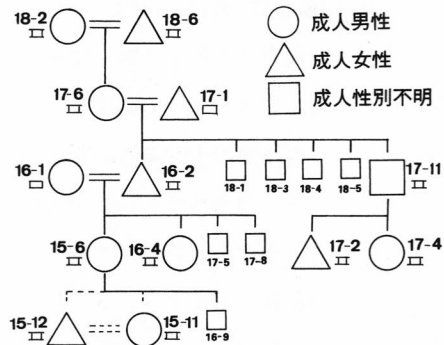


第7図 左坂墳墓群の被葬者と埋葬時期(1/500)

である。15号墓は、成人棺が多く中心的埋葬施設がわかりにくい。群内に首長墓(1号墳下層墓)が誕生する時期でもあり、被葬者集団に変革があった可能性がある。

(2) 丹後町大山墳墓群(第9・10図)

大山墳墓群は、京都府竹野郡丹後町字大山小字大門に所在し、丹後半島中央部を貫流する竹野川河口近くの左岸の低丘陵上に立地する。一辺10m規模



第8図 左坂墳墓群の親族構成モデル

の台状墓6基(3～8号墓)と周辺埋葬施設(台状墓の周辺主体及び丘陵斜面の埋葬施設群)からなり、弥生時代後期初頭から後葉にかけて計47基の埋葬施設が営まれている。台状墓の墳丘上には、成人棺1基を原則に小数の埋葬施設しか営まない点が他の墳墓群と大きく異なる特徴であるが、これを補うように墳丘区画溝内や墳丘裾部に台状墓と有機的関係の

強いと思われる周辺主体が営まれている。また、丘陵斜面には、台状墓と独立した埋葬施設群も認められる。<sup>(注13)</sup> 墳頂部には土器棺が営まれないものの周辺主体としては土器棺を受け入れていることも特徴である。墳墓群の造営は、3～6号墓の埋葬施設→3～6号墓の周辺主体→7・8号墓とその周辺主体及び丘陵斜面の埋葬施設群→丘陵斜面の埋葬施設群の順で行われている。

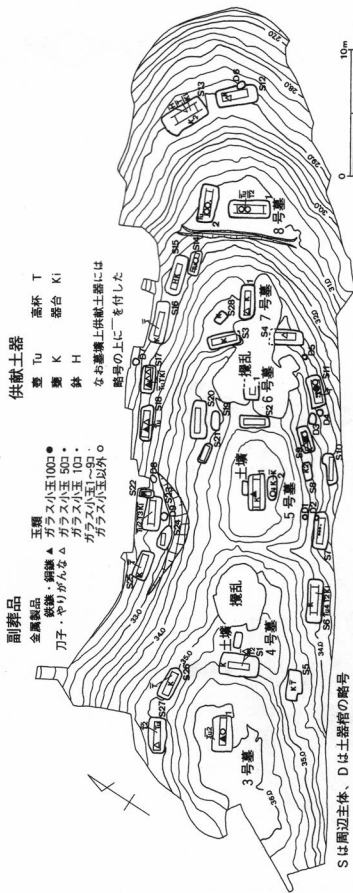
鉄製品(銅鏃含む)及び玉類の副葬は、各台状墓の中心埋葬施設と、幾つかの周辺埋葬施設に認められる。当墳墓群の築造契機となった3～6号墓の中心埋葬施設には、鉄鏃が副葬されていたと考えられ、男性が墳墓群の中心的位置を占めることがわかる。3～6号墓がほぼ同時に造墓活動を開始することから、集落を支える4つの家族が当墳墓群を営み、次世代へと継承させたものと考えられる。丘陵斜面の埋葬施設群の内、周辺第22～25主体・土器棺8・9からなる被葬者集団には、鉄製品の副葬がなく、階層差の存在が指摘できる。

次に左坂墳墓群と同様の条件で、被葬者集団の関係を考えてみる。各墳墓が独立しているため、親族構成の系譜を追及することは困難である。また、墳頂部の成人男性の配偶者をどこから求めるかが問題であるが、夫婦が同居することを前提に周辺の埋葬施設から求めた。墳墓群全体では、箱型木棺が優勢である。その中で5号墓及びその周辺は、その最初の被葬者にH型木棺が用いられている。造墓を開始した4家系の内1家系のみがH型系とするならば、8号墓とは密接な関係にあると考えられる。以上のように考えると第11図のような親族関係を示すモデルを作ることが可能である。

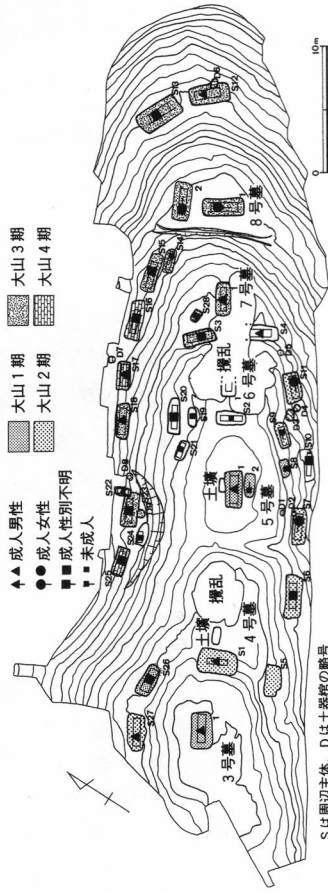
### (3) 豊岡市東山墳墓群(第12・13図)

東山墳墓群は、兵庫県豊岡市上鉢山字東山に所在し、円山川と出石川の合流部右岸の独立丘陵の先端部に立地する。その眼下には但馬地域最大の平野が広がる。調査されその概要がわかるのは、西尾根の1号墓及び東尾根の3・4号墓である。一辺15～20m規模の平坦面を造り出した3基の台状墓には、弥生時代後期初頭から前葉にかけて計40基の埋葬施設が営まれている。その内、38基が木棺墓と確認されており、原則的に土壙墓も土器棺墓も受け入れない墳墓群と言えよう。3号墓は、尾根線上の埋葬施設群と東斜面よりの埋葬施設群に分けることができる。4号墓については、その配置から南群と北群に分かれる可能性があるが区別できない。4号墓は、鉄製品の副葬傾向が著しいのと成人棺が多いのが特徴である。なお、3・4号墓においては、鉄製品及び玉類ともに棺上に副葬される傾向が強いことは、丹後地域の在り方と大きく異なっている。

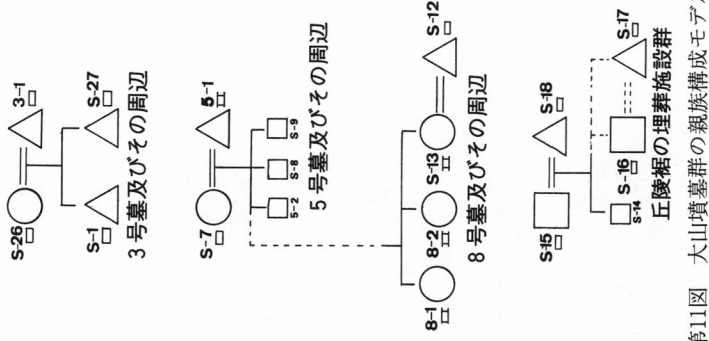
次に左坂墳墓群と同様の条件で、被葬者集団の関係を考えてみる。各墳墓間の有機的関係が把握できないため、親族構成の系譜を追及することは困難である。また、4号墓では、



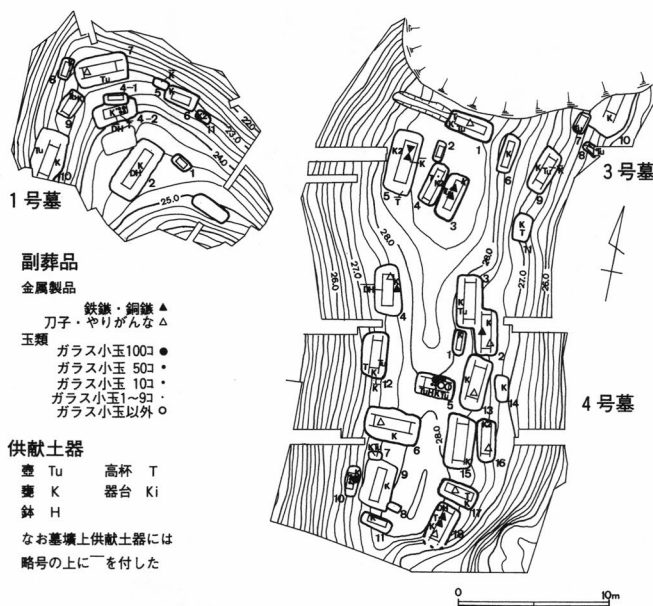
第9図 大山墳墓群の副葬品と供献土器(1/500)



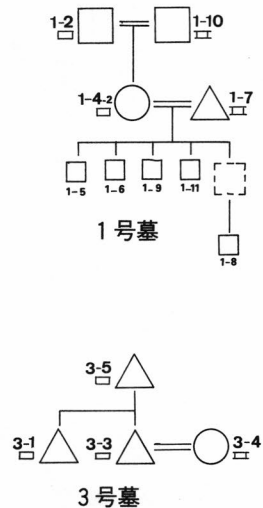
第10図 大山墳墓群の被葬者と埋葬時期(1/500)



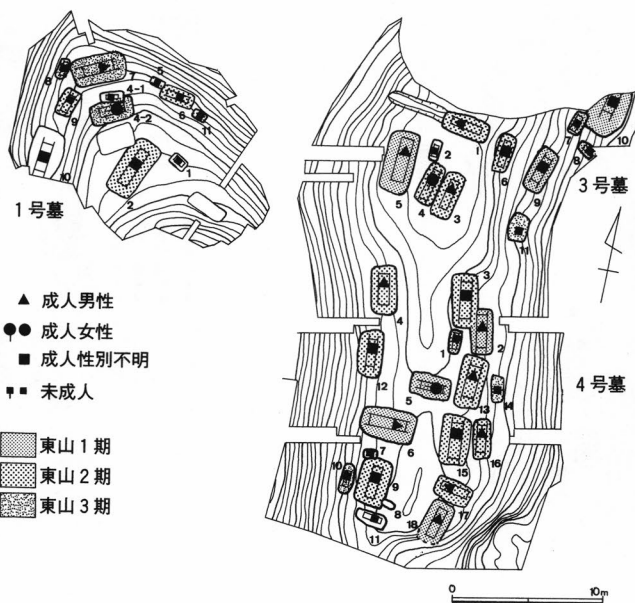
第11図



第12図 東山墳墓群の副葬品と供献土器



第14図 東山墳墓群の親族構成モデル



第13図 東山墳墓群の被葬者と埋葬時期(1/500)

成人の被葬者が多いため親族関係を求めるのが困難である。墳墓群全体では、箱型木棺とH型木棺がほぼ拮抗して用いられているが夫婦関係にあるものが少なくないと思われる。以上のように考えると第14図のような親族関係を示すモデルを作ることが可能である。

#### 4. 小 結

本稿では、幾つかの前提条件の上に、北近畿の副葬品と供献土器に恵まれた三墳墓群を検討し、被葬者間の関係を模索してみた。ほぼ同じ数の被葬者を持つ墳墓群を取り扱ってきたが、墳墓群の成立過程が異なるためか、そこに見られる被葬者集団の構成はかなり異なっていた。左坂墳墓群は、累世的な一家族が4世代にわたり4基の墳墓を造営しており、継続的な親族構成のモデルを復原することができた。そこに見られたのは、武器を扱う男性優勢の双系的社会であった。大山墳墓群では、4家族が造墓活動を始めたためか、各墳墓が2世代で収束する傾向にあり、次世代への系譜が把握しにくい。その中でH型木棺を優先的に採用する2つのグループを連続する系譜として捉えてみた。東山墳墓群では、1号墓は3世代にわたる親族構成のモデルを構築することができ、3号墓では、2つのグループの内、片方の親族構成モデルを構築することができた。一方、4号墓は、副葬品をもつ成人男子被葬者が多く、他の墳墓と被葬者の構成が異なっていた。そこには、家族と異なる集団の存在が想定され特筆される。

以上、本稿では、弥生時代後期における北近畿の副葬品を多数もつ墳墓群の被葬者層の解明をめざしたが、その結果として次のことが言えよう。

検討した墳墓群の大半がいわゆる家族的な系譜を考えることができ、家族墓であることが判明した。豊富な副葬品を持つ集団の中に、鉄製武器をもつ中心人物を抽出することができる。これらの墳墓群の被葬者は、有力集団からなる家族と考えることができよう。一方、家族と考えにくい、東山4号墓の存在がある。また、大山墳墓群の丘陵裾部には、鉄製品を持たないグループがあり、階級的な差異が認められる。今後、今回検討するに至らなかった当該期の首長墓の存在の三坂神社3号墓第10主体、左坂墳墓群1号墓下層第5・8主体及び26号墓第2主体の被葬者像を通して、弥生時代後期の北近畿の社会構造を解明していくことができよう。

本編を結ぶにあたり、日頃御指導・御教示を受けている次の方々々に感謝の意を表し結びとしたい。

杉原和雄・福永伸哉・長谷川達・磯野浩光・田代弘・細川康晴・瀬戸谷皓・松井敬代・宮村良雄・谷本進(敬称略、順不同)

(ひご・ひろゆき＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

- 注1 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成5年度発掘調査概要〔7〕左坂墳墓群(左坂古墳群G支群)」「埋蔵文化財発掘調査概報」1994 京都府教育委員会  
平良泰久・黒田恭正・常磐井智行ほか『丹後大山墳墓群』(京都府丹後町文化財調査報告第1集 丹後町教育委員会) 1983  
瀬戸谷皓、宮村良雄、松井敬代『上鉢山・東山墳墓群』豊岡市教育委員会 1992  
ほかに、当該時期の墳墓群として、福知山市宝蔵山墳墓群、豊岡市門谷墳墓群、中郡大宮町三坂神社墳墓群などがあり、今回扱った三墳墓群と同様副葬品指向と供献土器に恵まれるが、未公表な資料があり今後の検討対象としたい。
- 注2 銅鍬は、鉄鍬の代用品という観点から、本文中では鉄鍬と区別せずに扱う。
- 注3 当該地域の弥生墳墓の副葬例として以下のものがある。  
前期末～中期前半 石鍬の多量副葬。豊岡市駄坂舟隠墳墓群、久美浜町豊谷墳墓群。  
中期 碧玉製玉類の副葬。舞鶴市桑飼上遺跡、春日町七日市遺跡。
- 注4 松井敬代「破碎土器の埋納について—豊岡市神美地域を中心として—」『但馬考古学研究第6集』1991  
肥後弘幸「墓域内破碎土器供献(上・下)—近畿北部弥生墳墓土器供献の一樣相—」『みずほ』12・13号 1994
- 注5 本間元樹「弥生時代の合葬人骨」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』1993
- 注6 石崎善久ほか「金谷墳墓群(1号墓)発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第66冊 1995
- 注7 福永伸哉「木棺墓と人の交流」『原始・古代日本の墓制』同成社 1991ほか
- 注8 福永伸哉「原始古代埋葬姿勢の研究—近畿地方を中心に—」『日本古代墓制の考古学的研究—とくに埋葬姿勢と葬送儀礼との関わり—』大阪大学文学部考古学研究室 1990
- 注9 三坂神社墳墓群現地説明会資料 大宮町教育委員会
- 注10 肥後弘幸、今田昇一「京都府中郡大宮町左坂墳墓群」『日本考古学年報46(1993年度版)』日本考古学協会 1995
- 注11 石井清司「丹後地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編1 1989  
谷本 進「但馬地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 1992
- 注12 肥後弘幸「丹後地域の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年(上)—弥生時代後期—」『太邇波考古』第7号 掲載予定
- 注13 周辺第14～16主体については、報告者と異なり台状墓に帰属しない一群と考え、むしろ周辺第17・18主体及び土器棺7との関係を重視する。